



ジェンダー・パーソナリティが心理的ディストレスに及ぼす影響：多重役割としてのリーダー経験に注目して

著者	土肥 伊都子
著者別名	DOHI Itsuko
雑誌名	研究紀要. 人文科学・自然科学篇
巻	50
ページ	1-17
発行年	2009-03-10
URL	http://doi.org/10.14946/00001553



ジェンダー・パーソナリティが心理的 ディストレスに及ぼす影響^{1), 2)}

— 多重役割としてのリーダー経験に注目して —

土 肥 伊都子

<問題>

ジェンダー（社会的性）に関する個人特性がジェンダー・パーソナリティであり、その中心となる性格面が、女性性（femininity）と男性性（masculinity）である。これらは、自己評価の質問紙の女性性、男性性得点、あるいは女性性と男性性の高低の組み合わせによって類型化されるジェンダー・タイプ（心理的両性具有型・男性性優位型・女性性優位型・未分化型）などの指標で、心理的健康や社会的適応にどのような影響を及ぼすのかが検討されてきた（Marsh & Byrne, 1991；Hirokawa & Dohi, 2007）。従来の研究では、男女に関わらず男性性が高いと、自尊心、職業アイデンティティ、身体的有能感も高まるという結論がある一方、タイプA行動傾向が強まる（Dohi, Yamada, & Asada, 2001）など、男性性の否定的影響も示唆されてきた。女性性については、女性性が高いと抑うつが高まるという結果（Elizabeth, Katherine, & Malcolm, 1996）と、関連はないという結果（Whitley, 1984）が対立している。また、自尊心（Spence, Helmreich, & Stapp, 1975）、初対面の異性との会話における適応性（Hirokawa, Dohi, Yamada, & Miyata, 2000）、達成への価値志向、支配性や攻撃性の低さなどでは、男性性に加えて女性性も兼ね備えた心理的両性具有型が、最も肯定的な影響を及ぼすとされてきた。両性具有型の個人は、社会的行動の可能性が幅広く、状況に応じて柔軟に男性性と女性性を使い分けることができると考えられるからである。

1) 本研究の調査にあたり、甲子園大学の原田章先生、本学人間科学部心理学科4年 田中真弓さんにご協力頂いた。記して感謝申し上げます。

2) 本研究は、平成20年度松蔭特別研究助成（神戸松蔭女子学院大学）を受けた。

上記で示された通り、ジェンダー・パーソナリティの心理的影響についての結果は、必ずしも一貫していない。その原因の一つとして、男性性は作動性 (agency)、女性性は共同性 (communion) が中心的な特性として考えられているが、男性性・女性性の測定内容が他の複数の因子も含むことも多いため、研究によって測定内容が異なるという問題がある。原因の二つ目として、従来のジェンダー・パーソナリティはその肯定的側面だけで把握されることが多く、否定的側面を考慮しなかったことが考えられる (土肥・廣川, 2004)。そのような中、Helgeson (1993) は、男性の否定的作動性は健康配慮行動を抑制すること、女性の否定的共同性は抑うつ感や他者関係の損失をもたらすことなどを明らかにした。Hirokawa & Dohi (2007) の研究では、男女とも、否定的共同性が高いと自尊心が低いこと、また女性の場合、否定的共同性が高いと不安が高いことを見出した。これらの研究より、否定的側面のジェンダー・パーソナリティに注目することは、心理的に望ましくない影響を明確にするのに適していることが推測される。

そこで本研究では、学生生活でのストレス及び心理的ディストレス (psychological distress) を多重な役割従事と関連づけて取り上げる。心理的ディストレスとは、抑うつ、身体的な症状、不安など、個人が経験する不快な主観的状态 (稲葉, 1995) である。そして、ディストレスの原因がストレスであり、個人が社会的役割に従事することで経験する、役割過重、役割葛藤、役割束縛、役割喪失なども、これに含まれる (稲葉, 1998)。中高生、大学生にとっての具体的な多重役割には、授業に加えてのクラブやサークル活動、アルバイト、放課後に通う専門学校などがある。これらは比較的多くの学生にも該当する一般的なものといえる。一方、学級委員長やクラブの部長、生徒会役員など、いわゆるリーダーとして活動することも、多重役割に相当するものととらえることができる。

多重な役割従事の心理的影響に関しては、対立した仮説が提起されている。まず、拡大仮説 (Sieber, 1974)、アイデンティティ累積仮説 (Thoits, 1983) では、役割が満足感や自尊心の高揚、地位、高い自己評価の源となる点を重視し、肯定的影響を及ぼすものと考えられている。他方、不足仮説 (Marks, 1977) では、

人間のもつエネルギーには限りがあるとし、それを超える役割を担うことで、役割過負荷感や役割緊張、抑うつを引き起こしやすくなると考えられている。ここで、ディストレスは、個人のストレスサーへの認知や評価の過程を経て生じるものであるため、パーソナリティによって、多重役割からの影響もかなり様相が異なることが予想できる。つまり、ジェンダー・パーソナリティが異なれば、多重役割からのディストレスも異なってくると考えられる。

このディストレスに対するジェンダー・パーソナリティの心理的影響を明らかにすることが、本研究の第一の目的である。そして、女性性の主要因子である共同性と、男性性の主要因子である作動性のそれぞれの肯否両側面を測定するために、CAS (Communion-Agency Scale; 共同性—作動性尺度; 土肥・廣川, 2004) を用いる。これまで多くの研究で、リーダーとしてふさわしいのは男性的特性であるというジェンダー・ステレオタイプがあることが指摘されてきた。しかし、リーダーシップの機能論でいうところの課題達成機能と集団維持機能は、それぞれ、前者が男性性、後者が女性性としてステレオタイプ化されているものに相応する。つまり、Eagly & Karau (1991) のリーダーの出現に関するレビュー論文にもあるように、リーダーには女性性、共同性も必要なのである。そこで、女性性と男性性を兼ね備えた心理的両性具有型は、リーダーの経験自体も多く、また、リーダーに対する他者からの様々な要求にも上手く対処できたり、他者からの支援を得たり、自分の裁量で事を進めるといったスキルにも長け、多くのメリットを得ていると考えられる。言い換えると、心理的両性具有型は、リーダー経験から発生するストレスサーを抑制でき、それによりリーダーシップから発生しやすいディストレスが低いことが予想される。さらに、土肥 (2006) の提唱する典型的両性具有型の場合、否定的作動性、否定的共同性も低いので、メンバーを自分の思い通りに動かすことも、頼りにし過ぎることもなく、さらにディストレスは低いと考えられる。

本研究の第二の目的は、ジェンダー・パーソナリティから、自尊心、リーダー経験、ストレスサー、ディストレスへの影響過程を、パス解析によって明らかにすることである。Spence et al. (1975) をはじめ多くの先行研究で明らかにされてきた、両性具有型と自尊心の高さの関係より、肯定的作動性と肯定的共

同性が自尊心を促進すると仮定する。そして、その自尊心に基づいて、多重な役割であるリーダー経験も促進され、さらに、リーダー経験がストレスサーやディストレスを抑制するという関係が認められるかどうかを検討する。

<方法>

1. 対象者と調査の実施

女子大学生 181名（本学，兵庫県内の男女共学のK大学、広島県内の男女共学のF大学）、男子大学生 70名（K大学とF大学）、計251名に対して、2007年度の授業時間内に、集団で実施した。

2. 調査項目

①基本的属性；性別・年齢，学年・学科，出身中学・高校が男女共学か別学かをたずねた。

②リーダー経験；「学級委員長，生徒会長，クラブの部長など，あなたが経験した事のある役職と，その回数を記述して下さい（任期は問いません）」とたずね，学級委員長，部長・代表，委員会の委員長，生徒会長，生徒会副会長のそれぞれの経験回数を記入させた。

③自尊心；ローゼンバークの自尊心尺度を日本語訳（山本・松井・山成訳，1982）したものを使用した。10項目の5件法の自己評価のリカート尺度で，得点が高いほど自尊心が高いことを示す。

④ストレスサー；Karasek（1985）の尺度を基に水澤（2007）が作成した，「大学生用 D-C-S ストレスサー尺度」を使用した。32項目の4件法の自己評価のリカート尺度で，「要求（demand）の大きさ」は，得点が高いほどストレスサーが高く，「裁量（control）の大きさ」と，「支援（support）の大きさ」は，得点が高いほどストレスサーは低いことを示す。

⑤ディストレス；尾関（1994）の作成した大学生用ストレス自己評価尺度（Stress Self-Rating Scale）を使用した。35項目の4件法の自己評価のリカート尺度で，「抑うつ」，「不安」，「怒り」，「情緒的反応」，「引きこもり」，「身体的疲労感」，「自律神経系の活動亢進」の7下位尺度から成る。いずれの下位尺度も，

得点が高いほどディストレスが強いことを示す。

⑥ジェンダー・パーソナリティ；共同性－作動性尺度（Communion-Agency Scale, CAS；土肥・廣川，2004）の肯否両側面の共同性（女性性）と作動性（男性性）の各下位尺度（6項目ずつ），計24項目の4件法の自己評価のリーカート尺度で，得点が高いほどそれらの特性が強いことを示す。

<結果>

1. 尺度項目の選定のための主成分分析

(1) 大学生用ストレス自己評価尺度について，全調査対象者の回答を主成分分析した。固有値1.0以上の成分は5成分抽出されたが，スクリーテストの結果，1成分構造とみなすこととした。また，成分負荷量をみると，すべての項目がその第1成分に高く負荷したため，全項目の得点を加算し，ディストレスの得点とした。

(2) 大学生用 D-C-S ストレッサー尺度について，全調査対象者の回答を主成分分析したところ，3成分構造とみなし，「要求」の下位尺度6項目（ $\alpha = .701$ ），「支援」の下位尺度10項目（ $\alpha = .902$ ），「裁量」の下位尺度8項目（ $\alpha = .728$ ）の得点を加算し，ストレッサーの得点とした。

2. ジェンダー・タイプの特定

男女別に，CASの肯定的作動性と肯定的共同性のメディアン値を求めたところ，男女とも同点となり，それらをジェンダー・タイプ特定の分割基準とした。具体的には，肯定的作動性は15点以上を高群に，14点以下を低群にした。肯定的共同性は19点以上を高群に，18点以下を低群にした。肯定的共同性も肯定的作動性も高群のものを両性具有型，肯定的作動性が高群で肯定的共同性が低群のものを男性性優位型，肯定的共同性が高群で肯定的作動性が低群のものを女性性優位型，いずれも低群のものを未分化型とした。

さらに，ジェンダー・タイプに加えて否定的共同性と否定的作動性の高低も考慮し，典型的ジェンダー・タイプ（土肥，2006）を特定した。すなわち，両性具有型の中で否定的共同性も否定的作動性も低い典型的両性具有型，男性性優

位型の中で否定的作動性が高い典型的男性性優位型，女性性優位型の中で否定的共同性が高い典型的な女性性優位型，未分化型の中で否定的作動性も否定的共同性も低い典型的な未分化型である．なお分割基準は，否定的作動性の場合，女性は13点以上，男性は12点以上を高群にした．否定的共同性の場合，女性は18点以上，男性は17点以上を高群にした．それぞれのジェンダー・タイプに含まれる人数は，Table1の通りである．

3. 基本的統計量

Table1 男女別 各ジェンダー・タイプに含まれる人数

性別	ジェンダー・タイプ				合計
	両性具有型	男性性優位型	女性性優位型	未分化型	
女性	68(26)	34(14)	29(20)	49(8)	180(68)
男性	21(12)	14(4)	6(3)	29(3)	70(22)

() 内は，典型的ジェンダー・タイプ的人数

(1) リーダー経験

学級委員長，部長・代表，委員会の委員長，生徒会長，生徒会副会長の経験回数を加算し，「代表者数」とした (Fig.1参照)．t 検定の結果，男性より女性の方が，代表者数が多かった ($t(216.6) = -2.335, p < .05$)．また，代表者数が

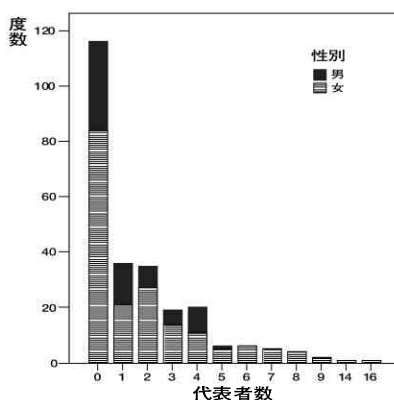


Fig.1 男女別代表者数の度数分布

0 回の、つまりリーダー経験が無いものが多かったため、リーダー経験が無い
か、有るか（1 回以上）で 2 分した。女性は経験有りが 97 名に対して無しが 84
名、男性は経験有りが 38 名に対して無しが 32 名となり、 χ^2 検定の結果、男女に
よりリーダー経験の有無には違いがなかった（ $\chi^2(1) = .10, n.s.$ ）。

（2）男女別の自尊心、ジェンダー・パーソナリティ、ストレス、ディスト
レスの基本統計量

自尊心、ジェンダー・パーソナリティ、ストレス、ディストレスの男女
別の平均値は、Table2 の通りである。t 検定の結果、否定的共同性は男性より女
性の方が高かった（ $t(248) = -1.517, p < .001$ ）。ストレスは、支援（ t
（249） $= -5.109, p < .001$ ）も要求（ $t(249) = -3.621, p < .001$ ）も、男性より
女性の方が高かった。ディストレスは、抑うつにおいてのみ男女差がみられ、
男性より女性の方が高かった（ $t(249) = -2.013, p < .05$ ）。

Table2 男女別の自尊心、ジェンダー・パーソナリティ、ディストレスの基本統計量

	女性		男性		t 値 (df=249)	
	平均	S.D.	平均	S.D.		
代表者数	1.9	2.7	1.2	1.5	* -2.34	
自尊心	28.3	7.4	30.0	7.3	1.62	
ス ト レ ス	要求	19.3	3.3	17.5	3.5	*** -3.62
	裁量	19.3	4.6	19.8	4.7	.82
	支援	33.3	5.0	29.4	6.5	*** -5.11
デ ィ ス ト レ ス	抑うつ	10.8	4.3	9.5	4.3	* -2.01
	不安	10.0	3.8	9.9	3.9	-.22
	怒り	9.9	4.2	9.0	4.2	-1.49
	情緒的反応	9.5	3.8	8.8	4.0	-1.15
	引きこもり	9.0	3.8	8.1	3.7	-1.86
	身体的疲労感	11.0	4.3	10.3	4.5	-1.16
	自律神経系の活動亢進	7.4	3.5	7.4	3.6	-.14

Table3 男女別 リーダー経験の有無によるストレス、
ディストレスの平均値 (S.D.) と t 検定の結果

	t 値	女性		t 値	男性		
		経験有	経験無		経験有	経験無	
自尊心	* -2.09	29.4(7.9)	27.1(6.8)	.722	29.5(8.3)	30.7(6.0)	
ストレス セッサー	要求	-1.29	19.5(3.3)	18.9(3.2)	1.20	9.87(4.6)	9.2(3.9)
	裁量	** -3.23	20.3(4.4)	18.1(4.5)	-1.29	4.9(.80)	4.3(.77)
	支援	-.970	33.6(5.4)	32.9(4.5)	.386	7.3(1.2)	5.6(1.0)
ディ ス ト レ ス	抑うつ	* 2.06	10.1(4.2)	11.5(4.3)	-.686	4.6(.75)	3.9(.70)
	不安	.868	9.8(3.6)	10.3(4.1)	-.950	3.9(.63)	3.9(.68)
	怒り	** 3.05	9.0(3.9)	10.9(4.4)	.520	4.1(.67)	4.3(.76)
	情緒的反応	* 2.43	8.8(5.6)	10.2(3.9)	.088	3.9(.64)	4.2(.74)
	引きこもり	* 2.33	8.4(3.7)	9.7(3.7)	.522	4.0(.64)	3.5(.62)
	身体的疲労感	1.01	10.7(4.2)	11.3(4.3)	-.680	4.4(.72)	4.6(.81)
自律神経系の活動亢進	1.19	7.2(3.4)	7.8(3.6)	-.387	7.5(3.7)	7.2(3.6)	

*p<.05 **p<.01

3. リーダー経験の有無によるストレス、ディストレスの差異

Table3は、男女別のリーダー経験の有無によるストレス、ディストレスとの差異についての t 検定の結果である。男性はすべてのストレス、ディストレスの得点に、リーダー経験の有無による有意差は認められなかった。それとは対照的に、女性はリーダー経験が有る人は無い人よりも、自尊心と裁量が有意に高く、抑うつ、怒り、情緒的反応、引きこもりは低かった。

4. ジェンダー・パーソナリティと自尊心、ストレス、ディストレスとの相関

Table4は、CASの4下位尺度得点と、自尊心、ストレス、ディストレスとのピアソンの相関係数を男女別に示したものである。CASに関して、男性は否定的共同性および否定的作動性とディストレス全般に、やや強い正の相関がみられた。女性は肯定的作動性と強い負の相関がみられた。

自尊心は、男女とも肯定的作動性および肯定的共同性と強い正の相関、否定的共同性とは負の相関があった。ストレスを下位尺度ごとにみると、裁量は、

Table4 共同性・作動性とストレスラー, ディストレスとの相関

	肯定的共同性		肯定的作動性		否定的共同性		否定的作動性		
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	
自尊心	** .39	* .31	* .66	** .52	**-.44	**-.62	-.02	-.07	
スト レ ス ラー	要求	** .32	.17	.09	.07	** .20	.17	-.07	-.11
裁量	** .45	** .54	** .59	** .67	**-.29	**-.38	-.04	-.23	
支援	** .43	** .56	** .40	** .50	-.03	-.20	-.04	**-.35	
抑うつ	**-.26	-.06	**-.35	-.14	** .30	** .52	.13	* .29	
ディ ス ト レ ス	不安	*-.17	.00	**-.20	-.15	** .24	** .54	* .18	* .30
怒り	-.13	-.14	**-.24	-.17	.12	** .47	** .23	** .49	
情緒的 反応	**-.38	-.07	**-.41	-.19	** .25	** .47	.13	** .38	
引きこ もり	**-.35	-.20	**-.46	-.20	** .26	** .51	* .18	** .43	
身体的 疲労感	*-.17	-.03	**-.30	-.11	** .24	** .48	.08	** .33	
自律 神経 亢進	**-.25	-.01	*-.18	.01	.05	***.37	.07	** .46	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

男女とも肯定的作動性および肯定的共同性と、強い正の相関がみられた。ただし、要求は男女差が大きく、女性だけが、肯否両側面の共同性と正の相関を示した。支援は、男女とも肯定的共同性、肯定的作動性と強い正の相関があり、男性に限って否定的作動性と負の相関がみられた。

5. ジェンダー・タイプと性別がストレス過程へ及ぼす影響 (Table5参照)

(1) 代表者数

代表者数に対する性別とジェンダー・タイプの2要因分散分析の結果、ジェンダー・タイプの主効果のみが認められた。ダンカンの多重比較検定より、両性具有型が他のいずれのタイプよりも、有意に代表者数が多かった。また、14回と16回の代表者数を飛び値とみなし、それらを除外して再度、分散分析したが、同様に、両性具有型が有意に多かった。なお、代表者が14回と16回の調査対象者は、両者とも両性具有型であった。

男女別の、リーダー経験の有無とジェンダー・タイプの χ^2 検定の結果、女性で有意な関連が認められ、両性具有型は、半数以上がリーダー経験をもち、男

性性優位型も経験の有る人の方が多かったが、女性性優位型と未分化型は、経験の無い人の方が多かった ($\chi^2(3) = 15.9, p < .01$)。

(2) 自尊心

性別の主効果とジェンダー・タイプの主効果が認められた。すなわち、女性よりも男性の方が、自尊心が高かった。また、未分化型や女性性優位型よりも、男性性優位型、さらに両性具有型の自尊心が高いことがわかった。

(3) ストレッサー

要求、裁量、支援に対する性別とジェンダー・タイプの2要因分散分析の結果、裁量と要求においてジェンダー・タイプ的主効果が認められた。両下位尺度に共通して、両性具有型は最もストレッサーが低い傾向が見られた。すなわち、要求は小さく、裁量は多かった。それとは対照的に、未分化型は、両下位尺度において、最もストレッサーが高いことがわかった。すなわち、要求が大きく、裁量は少なかった。支援については、性別とジェンダー・タイプの交互作用効果が有意であった。すなわち、未分化型、男性性優位型、両性具有型においては男性より女性の方が支援は多いが、特に未分化型でその性差が顕著であった。

(4) ディストレス

ディストレスに対する性別とジェンダー・タイプの2要因分散分析の結果、ジェンダー・タイプ的主効果のみが有意であった。すなわち、両性具有型は、他のいずれのタイプよりもディストレスが低かった。次に、ディストレスの下位尺度得点に関しては、不安、怒り、身体的疲労感、自律神経系の活動亢進においては、性別の効果もジェンダー・タイプの効果も交互作用効果も認められなかった。抑うつ、引きこもりでは、ジェンダー・タイプ的主効果のみが認められた。ダンカンの多重比較検定の結果、抑うつは両性具有型が最も低く、未分化型が最も高かった。引きこもりは、両性具有型が他のいずれのタイプよりも有意に低かった。怒りにおいては、性別の主効果のみが有意となり、男性より女性の方が高いことがわかった。情緒的反応では、性別とジェンダー・タイプの交互作用効果が有意となり、女性の未分化型において情緒的反応が最も強くなり、両性具有型は男女にかかわらず最も低いことがわかった。

Table 5 ストレス過程に対するジェンダー・タイプと性別の効果(分散分析の結果)

	F値(df)			ジェンダー・タイプの効果の ダンカンの多重比較検定				
	ジェンダー・ タイプ	性別	交互作用	A型	M型	F型	U型	
スト レス サ ー	代表者	F(3,242) = 3.91 **	n.s.	n.s.	2.67 a	1.49 b	1.05 b	.97 b
	自尊心	F(3,242) = 19.83 ***	F(1,242) = 5.25* 男>女	n.s.	33.0 a	30.4 b	26.3 c	24.5 c
	要求	F(3,242) = 3.80 *	F(1,242) = 3.74(*) 女>男	n.s.	19.9 a	19.5 a	17.9 b	17.8 b
	裁量	F(3,242) = 27.3 ***	n.s.	n.s.	22.3 a	19.6 b	18.5 b	16.5 c
	支援	F(3,242) = 21.2 ***	F(1,242) = 10.9** 女>男	F(3,242) = 3.68 * (Fig.3)	35.2 a	32.3 b	31.3 b	29.1 c
	抑うつ	F(3,242) = 3.07 *	F(1,242) = 5.11 * 女>男	n.s.	11.6 a	32.3 ab	31.3 ab	9.26 c
	不安	n.s.	n.s.	n.s.	10.6 a	10.3 a	10.0 a	9.3 a
	怒り	n.s.	F(1,242) = 3.28(*) 女>男	n.s.	10.4 a	9.9 a	9.6 a	8.9 a
	情緒的反応	F(3,242) = 5.62 **	n.s.	F(3,242) = 2.86 * (Fig.4)	10.6 a	9.7 a	9.5 a	7.8 b
	引きこもり	F(3,242) = 6.65 ***	F(1,242) = 3.81(*) 女>男	n.s.	10.7 a	9.6 a	8.9 a	7.2 b
デ イ ス ト レ ス	身体的疲労感	F(3,64) = 4.51 **	n.s.	n.s.	典型U 12.9 a	典型F 12.5 a	典型M 10.5 ab	典型A 8.7 b
	自律神経系の活動亢進	F(3,64) = 2.95 *	n.s.	n.s.	典型U 10.3 a	典型F 7.8 ab	典型M 7.6 ab	典型A 6.3 b

(*) p<.10 **p<.05 ***p<.01 ****p<.001

両性具有型はA型, 男性性優位型はM型, 女性性優位型はF型, 未分化型はU型と略す。中段の数値は, 尺度得点の平均値, 下段のアルファベット a, b, c は, ダンカンの多重比較検定の結果で, 異なる文字の間に有意差 (p<.05) があることを示す。

身体的疲労感と自律神経系の活動亢進のジェンダー・タイプの効果は, 典型タイプの主効果を記載。

6. 女性の典型的ジェンダー・タイプがストレス過程へ及ぼす影響

調査対象者の人数が比較的十分であった女性に関してのみ、典型的ジェンダー・タイプのディストレスに対する効果を1要因分散分析により検討した。その結果、上記のジェンダー・タイプと性別による2要因分散分析の結果とほぼ同様であったが、典型的ジェンダー・タイプでのみ認められた主効果は、身体的疲労感と自律神経系の活動亢進であった (Table5参照)。ダンカンの多重比較検定の結果、典型的両性具有型は、典型的女性性優位型および典型的未分化型よりも、身体的疲労感が低いことがわかった。また、典型的両性具有型は典型的未分化型よりも自律神経系の活動亢進が低かった。

7. ストレス過程のパス解析³⁾

本研究の調査対象者となった男性は70名だけであったため、パス解析を行うにはサンプル数が不十分と判断し、女性対象者のみについて分析した。

まず、肯定的作動性と肯定的共同性が自尊心を高め、それにより代表者数が増えるというモデルをパス解析したところ、十分な適合性が認められた ($\chi^2(2) = 5.98, n.s.$)。特に肯定的作動性は自尊心を強く促進し、その自尊心により代表者数も増すことがわかった。

次に、代表者数や自尊心、ストレスターのうち、いずれがディストレスを規定するのか明らかにするために、ディストレスを目的変数に、代表者数、自尊心、ストレスターの要求、裁量、支援を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、モデルの決定係数は、 $R^2 = .344$, $F(5,143) = 16.53$, $p < .001$ となり、重回帰分析モデルは有効であった。偏回帰係数は、自尊心 ($\beta = -.332$, $t = -3.84$, $p < .001$) と裁量 ($\beta = -.366$, $t = -4.09$, $p < .001$) が有意であった。そこで、この重回帰分析の結果を参考に、パス解析モデルを作成した (Fig.2参照)。分析の結果、適合性は十分とはいえなかったが ($\chi^2(8) = 103.6$, $p < .001$)、自尊心が代表者数を促進し、それにより裁量が高まり、その結果ディストレスが低減されるという、代表者数の間接的な効果を示すパスと、自尊心が直接ストレ

3) Amos5.0を用いて分析した。パス解析モデルの適合性は、 χ^2 検定の帰無仮説が採択されると、モデルとデータの間が乖離せず適合性があると判断される。

ス反応を低減されるというパスの双方とも、すべてのパス係数で有意となった。この結果から、代表者数が多いことは、自らの裁量を増すことにつながり、それがディストレスの低減となることが示唆された。

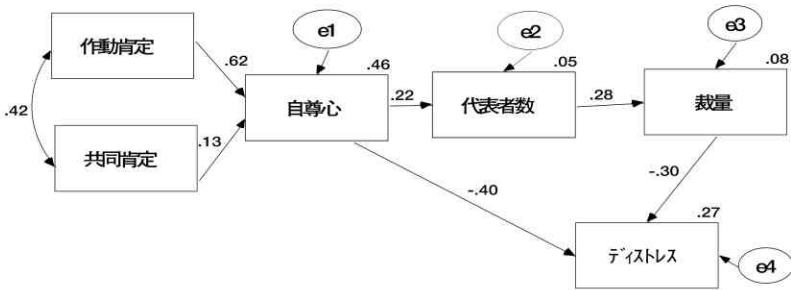


Fig.2 代表者数から、裁量、ディストレスへのパス解析結果
(矢印についた数値は、標準化パス係数で全て $p < .05$ で有意。目的変数の右上についた数値は、決定係数 (R^2).)

<考察>

本研究の第一の目的は、大学生のジェンダー・パーソナリティを、肯否両側面の共同性と作動性から測定し、リーダーとして多重役割に従事することに関するストレス過程への心理的影響を明らかにすることであった。

性差については、女性は男性に比べ、リーダー経験の有無とストレス、ディストレスとの関連も強く、よい意味でも悪い意味でも、多重役割からの心理的影響を受けやすい傾向がみられた。また、抑うつも男性より高かった。Matud (2004) の2,816名の成人男女の調査結果でも、女性は男性よりも、家族の死や誕生、親密な相手の病気など、対人関係に関わるものがストレスになりやすく、慢性的ディストレスや抑うつも高かった。これは、女性にはいわゆる「ケア役割」が期待されているためであろう。従って、リーダーとなり対人関係が増えれば、そこからの影響も大きいものと思われる。

ただし、性別とジェンダー・タイプの2要因分散分析の結果が示すように、ストレス過程により強く影響するのは性差よりも共同性や作動性のジェンダ

ー・パーソナリティの方であった。すなわち、両性具有型は、代表者数が最も多く、リーダー経験をする傾向が強いために要求のストレスが高い一方で、支援も多く受けており、しかも裁量も高いことから、多重役割からの過負荷などを上手く低減できていると考えられる。多くの先行研究で認められてきた両性具有型の自尊心が、こうしたストレス過程での有効な対処の基になっているのかもしれない。また、それを示唆するように、両性具有型は、抑うつ、情緒的反応、引きこもりにおいて、最もディストレスが低かった。土肥・広沢・田中（1990）が大卒女性を対象に、妻・母・就労者の役割従事について行った調査でも、両性具有型が従事する役割数は、男性性優位型と並んで多く、またいずれの役割からも高い達成感を得ていたのである。両性具有型と対照的だった未分化型は、要求の高さは両性具有と同程度であったが、他のジェンダー・タイプに比べ裁量を最も欠いており、ストレスは最も高いといえる。

次に、ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面のディストレスとの関連を比較すると、特に男性の自尊心や支援、ディストレス全般において、肯定面よりも否定面の方が、関連が強いことがわかった。したがって、今後もディストレスなどの否定的な心理的影響を考える上で、否定的側面も考慮することが有益である可能性が確認された。ただし、女性の場合、肯定面だけで特定した従来のジェンダー・タイプと、肯否両側面を考慮した典型的ジェンダー・タイプとを比べると、全体的にはディストレスへの効果にあまり違いはみられなかった。詳しくいえば、身体的疲労感、自律神経系の活動亢進のディストレスで、典型的ジェンダー・タイプだけの有意な主効果がみられたにすぎなかった。典型的ジェンダー・タイプを特定し、その効果を検討することの有効性については、今後も調査する必要がある。その際の検討課題の一つが、典型的ジェンダー・タイプの特定方法である。特に、未分化型について、肯否両側面とも、共同性も作動性も低いものと特定してきたが、土肥（2006）の男性性・女性性の規定モデルに反して、否定的共同性と否定的作動性が相対的に高いことが明らかにされた研究結果も少なくないからである。

本研究の第二の目的は、ジェンダー・パーソナリティから、自尊心、リーダー経験、ストレス、ディストレスへの影響過程を、パス解析によって明確

にすることであった。女性に関しての分析の結果、代表者数が多く、リーダー経験を持つことは、自らの裁量を増すことにつながり、それがディストレスを低減することが示唆された。Johanson (2008) によれば、従来は男性的とされたリーダーのイメージに、最近では女性的イメージも加わってきた。つまり、体制作りも配慮もできる両性具有的リーダー (Hall, Workman, & Marchioro, 1998) が期待されているという。本研究に照らせば、多重役割のメリットを得つつ、裁量と支援の両方を得ることでストレスを最小限におさえられるのが、両性具有的リーダーだといえよう。

ところで、多重役割従事の一つとしてのリーダー経験は、現在の大学生生活のものだけでは数が少なすぎると予想したため、本研究の質問紙では、現在までの学生生活で覚えているものはすべて、回答してもらった。したがって、過去のリーダー経験が、現在のディストレスと直接つながっているとは限らない。現在の大学生生活のリーダー経験の影響を測定することが、今後は必要である。また、現在の多重役割の影響は、学校内だけのリーダー経験にとどまらない。アルバイトや学外ボランティア、家族の介護や家事などへの従事をたずねることも、今後検討すべきであろう。さらに、多重役割の量をより正確に測定するために、生活時間を調査 (土肥, 1991) することも新たな知見を得るために有益となるであろう。

<文献>

- 土肥伊都子 1991 多重な役割従事に関する研究－生活時間を測定して－ エッソ石油株式会社 女性のためのエッソ研究奨励制度研究報告集, 9, 34-39.
- 土肥伊都子 2006 男らしさ・女らしさ 福富護 (編) 講座心理学14 ジェンダー心理学 朝倉書店, pp.105-120.
- 土肥伊都子・廣川空美 2004 共同性・作動性尺度 (CAS) の作成と構成概念妥当性の検討 —ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定 心理学研究, 75, 420-427.
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫 1990 多重な役割従事に関する研究 —役割従事タイプ, 達成感と男性性, 女性性の効果 社会心理学研究, 5, 137-

- Dohi, I., Yamada, F., & Asada, H. 2001 The relationship between masculinity and the Type A behavior pattern: the moderating effects of femininity. *Japanese Psychological Research*, 43, 83-90.
- Eagly, A.H., & Karau, S.J. 1991 Gender and the emergence of leaders: A meta-analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 685-710.
- Elizabeth, W.B., Katherine, S.G., & Malcolm, G. 1996 Femininity, depression and stress in college women. *Social Behavior and Personality*, 24, 329-334.
- Hall, R.J., Workman, J.W., & Marchioro, C. 1998 Sex, task, and behavioral flexibility effects on leadership perceptions. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 74, 1-32.
- Helgeson, V.S. 1993 Implications of agency and communion for patient and spouse adjustment to a first coronary event. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 807-816.
- Hirokawa, K. & Dohi, I. 2007 Agency and communion related to mental health in Japanese young adults. *Sex Roles*, 56, 517-524.
- Hirokawa, K., Dohi, I., Yamada, F., & Miyata, Y. 2000 The effects of sex, self gender type, and partner's gender type on interpersonal adjustment during first encounter: androgynous and stereotypically sex-types couples. *Japanese Psychological Research*, 42, 102-111.
- 稲葉昭英 1995 性差, 役割ストレイン, 心理的ディストレス —性差と社会的ストレスの構造— *家族社会学研究*, 7, 93-104.
- 稲葉昭英 1998 ジェンダーとストレス *季刊家計経済研究*, 冬, 32-40.
- Johanson, J.C. 2008 Perceptions of femininity in leadership: Modern trend or classic component? *Sex Roles*, 58, 784-789.
- Karasek, R. 1985 *Job Content Questionnaire and User's Guide*. University of Massachusetts at Lowell.
- Marks, S.R. 1977 Multiple roles and role strain: Some notes on human energy, time and commitment. *American Sociological Review*, 41, 921-936.

- Marsh, H.W. & Byrne, B.M. 1991 Differentiated additive androgyny model: Relations between masculinity, femininity, and multiple dimensions of self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 811-828.
- Matud, M.P. 2004 Gender differences in stress and coping styles. *Personality and Individual Differences*, 37, 1401-1415.
- 水澤慶緒里 2007 要求度-裁量度-支援度モデルに基づく大学生のストレスサー - 大学生用D-C-Sストレスサー尺度の作成 - 日本応用心理学会第74回大会発表論文集, 31.
- 尾関友佳子 1994 大学生の心理的ストレス過程の共分散構造分析 *健康心理学*, 7(2), 20-36.
- Sieber, S.D. 1974 Toward a theory of role accumulation. *American Sociological Review*, 41, 921-936.
- Spence, J.T., Helmreich, R., & Stapp, J. 1975 Rating of self and peers on sex role attitudes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 29-39.
- Thoits, P.A. 1983 Multiple identities and psychological well-being: A reformation and test of the social isolation hypothesis. *American Sociological Review*, 48, 174-187.
- Whitley, B.E.Jr. 1984 Sex role orientation and psychological well-being: Two meta-analyses. *Sex Roles*, 12, 207-225.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 *教育心理学研究*, 30, 64-68.

外国語題名) The influences of gender personality on psychological distress
: Focusing on experiences of leaders as multiple roles.